

横浜ダンスコレクション 2020 コンペティションI 総評

韓国、香港、台湾、フィリピン、日本から 10 組が参加したコンペティション I では、多様なアプローチで身体に向き合い、核となるコンセプトを適切に展開させた佳作が揃った。なかでも、身体とそれが置かれた空間、流れる時間を巧みに構成した作品が高い評価を得た。横山彰乃『水溶倍音』は、無数のペットボトルを貼った壁を背景に繊細な振付を展開し、色も形もない水のごとくに変性し流動する人間の感情のモーメントを視覚化し、心捉えるダンスにした。敷地理『ハッピーアイスクリーム』は、舞台上の混沌としたインスタレーションと崩れ落ちる 3 つの身体、マイクで増幅され空間を満たす呼吸音を重ねて隔たった複数の時空が干渉し合う様を描き、現象の背後に存在する不可視の関係性を掬い上げたエフェメラルなダンスだ。

ローカルなコンテキストを抽象化し、ダンスに昇華したラウル・エル・ラキティコ・ジュニア、ソン・ユンジュ、リン・ティン・シュイ、詩的なリン・チュンウも、見応えがあった。Von・no ズ、下島礼紗の作品では、主題のさらなる展開を期待している。

実はダンスは、ダンスをめぐる種々のことがらで成り立っている。YDC は、技術を越えて、世界を新たに発見させてくれる振付作品の集まる場なのである。

岡見さえ

187 組・38 カ国に及ぶ国々から送られてきたビデオ審査プロセスでは、アフリカやアジアの地域から、既存のダンスコンペティションの枠組みを超えたユニークな作品の応募がいくつもあり、異なる社会背景からのダンスの視点の広がりを強く感じました。

審査では、振付における身体のボキャブラリーの革新性、作品構成やテーマへの思考、ダンスの表現力における身体の強度、総合力、既存の作品創作の枠組みへの挑戦・逸脱を基準とされ、各審査員から結果が出されました。それ故、各賞がそれぞれ異なる視点によって評価されていることも、このコンペティションのユニークな点だと思います。

総じて静謐な振付、空間演出にも思考を凝らした総合力が高い作品が多く、成熟した作品創作思考をしっかりと受け取ることができ大変頼もしく感じました。反面、作品コンセプトを突き抜けるダンス表現、強烈な身体が存在に出会えなかったことは少し残念でした。

既に多くのことが試みられ、いつしかコンテンポラリーダンスは既視感との戦いにもなってしまったようにも思えます。しかし、ダンスをつくることは身体と世界の繋がりを探求し、人間の飽くなき魅力を追求する行為です。日々変容する身体と社会がある限り、永遠に未知の領域は存在し続けています。若手振付家の皆さんが、新たな感覚で私達を驚かせてくれることを楽しみに、今後のご活動を心から応援したいと思います。

北村明子

今回は、またふりだしに戻ってしまったような、とらえどころがしづらいコンペティション1になった気がします。たまたまかもしれませんが、映像審査の段階のほうが、期待とは違う方向での広がりもあり心踊りました。上演審査では、その様子が薄らいで感じられました。もしかすると新しい実践がはじまったという期待を高めすぎたのかもしれませんが。

いつも以上に国際色豊かな感じでしたが、作品としての強度は、なにか物足りなさを感じました。個人個人がどのように主眼をもち、影響をもつかをもっと、さらけ出すように、自分の前に用意してほしいと実感を持ちました。

コンペティションは、性質上、非常にクールな状況で発表が行われますが、それ自体をもっと飲み込むような記憶にのこる出来事が舞台上で起きてほしいです。

コンテンポラリーダンスの価値をコンペティションそのものから広げるために、僕ら審査員も含め、もっと活動的にそして前向きにとらえていきたいとも思います。

アートの価値をずぶずぶと沈めないためにも、あーだこーだ言いながら、話したり褒めたりしながら、作品を次々と産み出す気持ちでいたいです。

これからもコンペティションの価値を感じながら向き合っていければと思います。

今回の受賞者の今後のつながりも、注意深く見ていければと思います。

近藤良平

今年のコンペも改めてコンテンポラリーダンスについて考える機会になりました。作品を作る技術、演出、構成などのレベルは低かったとは思いませんが、今、ダンスで何をしたいのか、なぜダンスなのか、コンテンポラリーダンスでしか現れない身体、生まれないダンスがあって、だからこそそのコンテンポラリーダンスなのだと思っていますが、今回はそこまでは届かなかったという印象でした。ダンスの専門家ではない自分からの問いは常に変わりません、なぜあなたは踊っているのか、それが見たい。審査員賞の横山さんは作品の構成や振付を総合的に高く評価しました。まだまだ悩みが見えて伸び代があるので今後にも期待しています。あとはとにかく作品を作りたくて結果的にダンスにも見えている敷地さんの作品の可能性と気概、Lin Chun-Yuさんのレベルの高い構成、振付を個人的には高く評価しました。全体的にはせつかくのコンペですから、もっと賞を獲りにいく気概も感じたいと思っています。自信のある作品、どういった評価になるか試したい作品、様々な意欲作を期待しています。今年の映像審査では台湾からの作品のレベルが高い印象でした。今後の日韓台の東アジアでの切磋琢磨にも期待します。

多田淳之介

38カ国187組の応募から選ばれた10作品は、技法も主題もこれまで以上に多様に拡散していくさまが見られて興味深かった。敷地理『ハッピーアイスクリーム』は今回いちばんの問題作。美術からダンスへの横断はパパイオアヌーやカステルッチらの舞台が真っ先に想起されるが、敷地の作品も白に包まれた美しい空間といい、息が支配する時間といい、いずれも間然するところがない。次作ではこの空間の強度に十二分に拮抗する身体を生み出してほしいと思う。女性だけのカンパニーlal bansheesを主宰する横山彰乃のソロ『水溶媒音』は、ペットボトルが幻想的な光を放つ空間で、次第にもろさ、儂さを露わにしていく身体を巧みに見せた。彼女にしか出せない独特の叙情性も魅力。受賞者公演がいまから楽しみだ。Von・noズ『不在をうめる』は、闇が空間を切り裂くなか、オレンジ色のドレスと帽子で顔を隠しつつ踊る。その強迫的なステップから不穏な空気が立ち上がって鮮烈だった。台湾のリン・チュンウユ『A Pillow Song』は、テルミンの不思議な音色が奏でるチャイコフスキーの「感傷的なワルツ」で踊られる。女性2人が繰り広げる夢想的なデュエットがとても心に残った。そのほかの作品もいずれも力作だったが、ダンサーの身体そのものが舞台に屹立するような作品が今回も見られなかったのはやはり残念。

浜野文雄

2020年の横浜ダンスコレクションは非常に豊かな年だった。驚くほど素晴らしいアーティスト・グループが振付作品を発表した。まずは彼らに感謝を申し上げたい。ダンスに深く関わり、ダンスを信じ、彼らだけが恐れを抱かずこうして挑戦をしていることに。彼らは多くの応募者の中から選出されたが、その事前審査を行った審査員の皆様にも感謝を申し上げたい。何時間にもわたるビデオ審査を行うことは、別のやり方でダンスに深く関わるということだ。

私見では、全体のレベルは非常に高かったが、時に特異性には欠けていた。本質的に似通ってしまった作品もあった。コンペティションという形式はしばしば驚きを要求する。この瞬間、この観客の前でこのダンスを行うのはなぜかという問いが生まれる。一例を挙げれば、今年のダンスコレクションでは多くの作品でオブジェが使われていたが、今年のフランス大使館賞を受賞した、私が特異性を強く感じた作品では、オブジェではなく彫刻が提示されていた。敷地理は、身体が、ひとつの要素ではあるものの唯一の主題ではないという独自の雰囲気を作り出していた。

最後にフランスと日本という両国間の芸術、交流、協力を引き続き支援して下さった横浜ダンスコレクションのチームの皆様と在日フランス大使館に感謝を申し上げたい。

エマール・クロニエ